

鄭 貴 文



東 方 社 版

民族の歌

(乱丁・落丁の場合はお取替え致します)

昭和四十一年三月一日発行

定価四二〇円

著者 鄭 貴 文
ちよん き ぶん

発行者 石渡 磨 須子
いしわた すすこ

整版者 内田 柳 次郎
うちだ りゅうじろう

発行所 東京都文京区高田豊川町六〇
東方社

振替東京五七七四番
電話(九三)四四五一・四番

(印刷・邦文堂印刷所)

長編小説

民族の歌

鄭

貴

文

目次

第 六 章	第 五 章	第 四 章	第 三 章	第 二 章	第 一 章
-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------

193	167	123	81	37	7
-----	-----	-----	----	----	---

装
幀

朴

美
季
子

第一章

女が四十歳になったということは、それなりに大きな坂を越したことになるのでしようが、いつたい、いつの間にこんな年をとつたのかと、今さらながら不思議に思えてなりません。

つい数日前に、あの第二次世界大戦が終つたのですけれども、どうもその戦争の期間だけ、年をとるのを忘れていたような気がするのです。だからといって——終戦——というものが、それまでたまつていた私の年を、一ぺんに積み重ねてくれたわけではないのでしようけれども……

数年の間、張りつめていましたし、疲れてもいて、女としての年齢への執着など、かまつている暇もなかつたようです。それが、戦争が終つた、ということでしたがたにゆるみだし、ほつとして、「私も四十になつていた」と気が付いたのかも知れません。

でも、じつのところ私には、年齢のことをとやかくかまつているほど、終戦となつた現在を、安易な気持でいるわけにはいかない事情があるのです。

幸い私たちの住んでおりますこの京都は、空襲だけはまぬがれましたものの、今日明日を食べることさえ容易でないのは、どことも同様です。ですから、そういう生活の上での苦勞など問題

ではないのです。

もう一つ幸いなことは、夫も、子供たち三人も、それに私もふくめて、五人家族はみな無事です。私の町内を見まわして見ても、おおかたの家では身うちの誰かを戦争で亡くしております。それを思いますと、みなさんにすまないような気がしますけれども、私たちの家族にとつて、こんな幸せなことはありません。

けれども、はた目には大変めぐまれたかたちで終戦を迎えたにもかかわらず、私はそれをよろこぶことができないのです。日本は戦争に負けたといえます。何だか不思議な気がしてなりません。それにもまして想像もできないことは、日本に、この京都に、アメリカの軍隊が来て占領するということです。でも、それすらも、私にはどうでもよく「ヤンキーが日本に踏み込んで来たら、男はその機能を注射一本で無くされ、婦女子はなぶりものにさせられる」と、戦争中からいわれていた恐怖さえも、私にはたいした関心事ではありません。

私にはやはり、日本の敗戦ということや、アメリカ、などということより「朝鮮」あるいは「朝鮮人」ということの方が、何倍も何十倍もの重みで、私にのしかかつて来るのです。安易な気持ちで終戦を迎えるわけにはいかない事情というのは、じつはそのことです。

私の夫は、朝鮮人なのです。ということは、私の方は日本人だということになります。

その夫は、いま大阪にいますのですが、八月の初旬に家を出ており、終戦の日の十五日を経て一週間になりますけれども、まだ家に帰つて来ないのです。夫といつしよに大阪に向いた商売仲間の人、十六日の日に帰つて来ており、安否を知つたのですが、無事だとのことです。

多分仕事のあと仕末のことで、手間どつているのでしょうか、それにしましても戦争が終つたというのですから、とりあえず一度帰つて来るべきでしょう。ものの二時間もあれば帰れます。

でも私は、夫の帰りを首を長くして待つてゐる、というのではないのです。それかといつて、全然待つてゐないわけでもないのですけれども。戦争が終つたということを境にして、大阪と京都という近い距離であるにせよ、離ればなれになつてゐるのですから、妻は夫の帰りを待つべきでしょうし、夫は一日も早く、いえ、一時間でも一分でも早く家に帰るべきでしょう。

ひと様には理解してもらえそうもない、私たちのこういうすがたではありますけれども、私たち夫婦にしてみれば、それぞれに理由のあることなのです。ですから私は、夫の帰つて来ないのを左程不満にも思いませんし、また帰つて来ないことを別段ねがつてゐるわけでもないのです。それはまた、多分夫の方も、私と同じように、帰りを急いでもないなければ、急がないでもない、といった半ばな気持ちでゐるのではないのでしょうか。

私たち夫婦の、こういつたあいまいなくらし方は、じつは今にはじまつたことではなく、かな

り以前から、だいたいこんなような状態でした。

愛情がなくなつたからとか、倦怠期がきたからとよくいいますが、そうひとくちにいつてしまえない様々な事情や事件が、つもりつもつた結果、こうなつたように思われるのです。

私たちの間には、十八歳をかしらに三人の子供がおります。どういふのでしょうか、この三人の子供たちまで、帰つて来ない父親のことには何も触れたがらないのです。というよりは、帰つて来ないのを、ひそかに願つているようなふしさえ見えるのです。

昨日もこんなことがありました。網戸棚を開けたおり、そこに入っている夫の茶わんが、十日も使つていないものですから、ひどくほこりを被つているのに気づきましたので、十六になるまん中の娘に、洗つて置くように付けたのです。そうしますと、

「帰つて来もせえへんのに……」

プイと、そういう捨てるのです。帰つて来ない父への不満から、あてこすりをいつているようにも聞こえますが、私にはそれが、帰つて来なくてもいい、帰つて来ない方がいい、というようなとれたのです。

私たち夫婦のことは、今さらどうなるものでもありませんが、でも子供たちの将来のことはよく考えねばならないことです。

夫は、二十年の間私との生活を通じて見ますとき、どこまでも朝鮮人であつたのです。日本人になりきろうとしたり、あるいはそうなりきつたつもりでいる朝鮮人もいましたが、夫はそうではありませんでした。日本語を話すとか、夏は家でゆかたを着、冬は丹前を着るといったことを除いては、朝鮮人そのものでした。

朝鮮の国は、独立をするといひます。そうなりますと、夫はいままでどおりの朝鮮人であつていいわけです。いえ、もつともつと朝鮮人になつてゆくことでしよう。

しかし、日本人である私と、私との間の三人のあいの子は、これからさきどうなるのでしょうか。私たち夫婦の間に、しつくりした愛情があつて、慈んで育ててゆくにしても、つい数日前まで征服をしていたという民族と、征服をされていたという民族との間に生まれた子供を、戦争が終つてその立場がさかさまに變つたからといつて、いつたいどう導いてやればいいのでしょうか。

でも、そんなことをあれこれと思ひわづらう前に、私たち夫婦のことをこのさいもつと考へねばなりません。それはまた、子供たちの親としての存在を、全く一變してしまつたいまの時点から、考へ直さねばならないこともあるわけです。

戦争が終り、自分が四十歳になつてゐることに氣付き、そして歸つて来ない夫を待つでもなく、

待たないでもないといった虚ろな私の頭にうかぶのは、さまざま過ぎた日のことです。

夫との二十年の生活は、それは愛でもありましたが、同時に忍従でもあつたようです。夫への忍従は、当り前でしようけれども、しかし私は、私の実家から、あるいは世間から、というよりも日本というこの国から、忍従を強いられたともいえます。輕蔑、屈辱、圧力を忍ばねばならなかつたのです。

それに耐え忍ぶことで、私たちの愛情なり生活が守られたのなら何もグチることはないのですけれども、そのたびに私たちの愛情や生活は、ときには変形したり、ときにはヒビ入るのです。

いま私は、負け惜しみではなしに、夫の帰つて来るのをさほど待ちわびてはおりません。こういう冷ややかな氣持でいられるのも、考えて見ますと、二十年間にもつりつたものもろのものが、終戦という異常な体験をはさんで、私をさえぎろうとしているからだと思います。

目には見えない深いところに、お互いはどうにもならない何かをかかえて、それをいつの間にか表だけ癒着させてしまつているのでしょうか。

二十年前までは、私は日本人としての一人の娘でした。いまの年齢を折半するように、あとの二十年は、なかば朝鮮人のように暮らしてきました。内鮮融和だの一体だのという、昭和のはじ

めからすすめられた日本の皇民化が、きびしい弾圧のもとですすめられましたが、そんなときでも私は朝鮮語を話していましたし、朝鮮の食べ物もつくっておりました。

でも、いまそういうことを思い返して見ますと、その努力といったものの意味がわからないような気がします。いくらそうして見ても朝鮮人にはなれませんか、また朝鮮人になりきろうとしてそうしたのでもなかったのです。朝鮮人と夫婦になつた日本の女の宿命とでもいいですか、わけがわからなくなつてしまいます。

昔のその頃は、朝鮮人を爪はじきたり、ろくに人間あつかいにもしないような時代でした。そうしたなかで私は夫に愛情を感じていつたのです。

生活の一部は朝鮮人のようなものでしたけれども、でも性根のどこかにはやはり「私は日本人だわ」という優越感と自尊心がたしかにありました。むづかしい朝鮮語を覚えながらも、その舌で、口なれた日本語のなめらかさを味わつたことも事実ですし、いまでこそ一食も欠かせない朝鮮料理も、はじめのころは、何とヤバな料理だろう、と思つたことも事実です。

そういうどうしようもない矛盾をかかえながらも、またそれを意識しつつ、とにかく二十年を暮らしてきました。

八月の大阪の上空襲で、おれは、ありつたけの金をはたいて仕入れた二千着の作業服を、灰にしまつた。あと一日か二日あれば、金に替つている。

郊外にある商売仲間の家から、まだくすぶり燃えている大阪の街をさして、明け方から五時間かかつて、品物を置いてある倉庫へ行きついた。焼け出された人々が、毛虫のように動めき、悪臭と煙りが道という道を覆うていた。いや、幹線道路以外の道路は、街と共に姿を無くしていった。

おれは街を、かき分けるようにして歩いた。ふつうだと、五十分もあれば行けるところを、五時間もかかったが、品物どころか倉庫の姿さえ無くなつていた。気が付くと、おれは灰をかき分けていた。ボタンがいくつか灰の中に見えた。たしかにそれは、作業服のあのボタンであつた。

こうしておれは、無一文になつたが、そのとたんに戦争が終つたというのである。このまま京都に引揚げるわけにもいかず、こうして仲間の家にいるのだが、戦争が終つたら終つたでまた闇商売もあらうと思ひ、何かの手づるをつかもうとあせつてもいる。